

# パンテックユニオン 海外現地工事視察 (台湾)



執行委員

仲村 智博

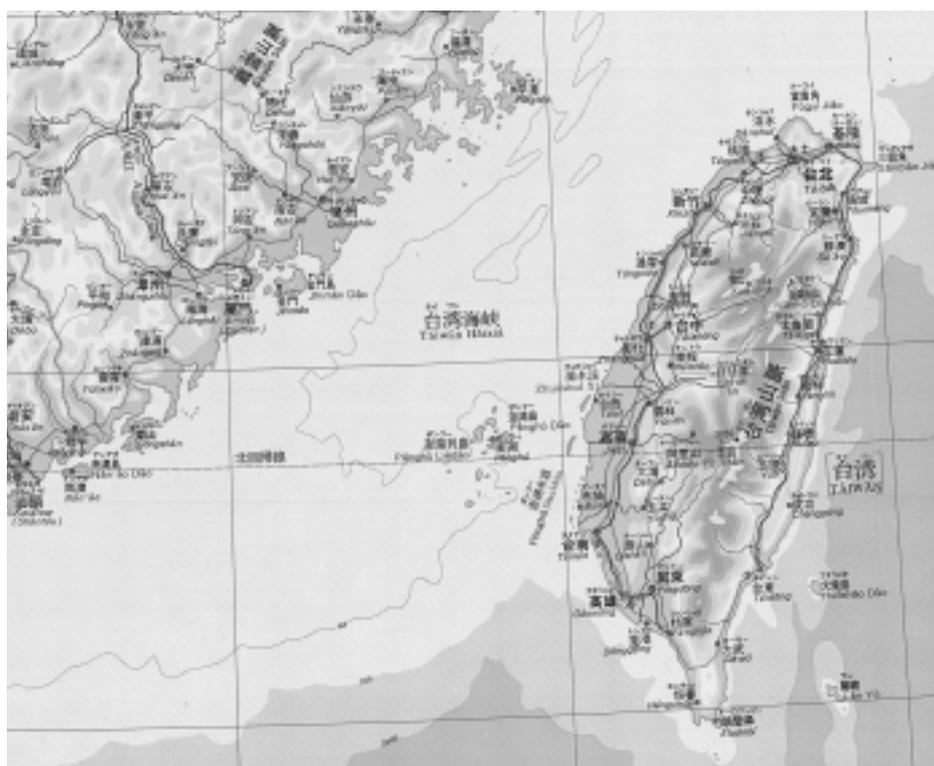
(化・生産部 第1製造室)

## はじめに

昨年の9月15日から18日の4日間、全国労働衛生週間準備月間におけるパンテックユニオンの取り組みとして、海外事業所の現地工事視察および安全パトロールを行うことを目的に、台湾の桃園にあるQDI社と新竹にあるUNIPAC社の2現場に出向きました。

安全パトロールとはいっても実際には自分自身の勉強という要素が強く、個人的には他の事業部の方々が活躍する姿を見ることにより、少しでも大きな視点から当社の事業を知ることができれば良いと思いながら現地台湾へと行って来ました。

今回はその出張での出来事、感じてきたことを報告したいと思います。



## 台湾はこんな所

台湾の面積は、九州とほぼ同じ大きさで、約2,000万人の方が暮らしています。台湾は、日本と同じ島国で、島の中央には、南北にかけて山脈が連なっており、1番高い山は、「玉山」といい、富士山より高く、海拔3,952メートルにもなります。島のほぼ中央に玉山など高い山々があるため、島の東側と西側の交流は、あまり多くありません。

台湾は中国大陸とは、独立した政治形態を持っているため独立国家と思われがちですが、国家として正式に認められておらず、地域の名前で「台湾省」と呼ばれています。

台湾の言葉はほとんどが北京語であり、台湾語は西側の田舎の方で使われているようです。また、戦争当時、日本の教育を受けた人々が多く、60歳以上の方の中には日本語が話せる方が多いようです。

台湾の通貨は「元」で、日本円の10円が約4元となっています。現地での移動はほとんどタクシーを利用しましたが、私が訪問した当時はワンメーターが50元であり、約200メートル走行毎に5元ずつ加算されました。タバコの値段は現地台湾のタバコが25元、海外からの輸入物は40円で、台湾でマイルドセブンを買うと日本円で150円程度となります。

また、台湾の人々は大変日本が好きようで、特に若い世代である10代から20代前半の若者が



日本に憧れをもっています。ここ2,3年で新しい言葉として日本が好きという意味の「哈・日・族」(サー・フォー・ズーツー)という言葉ができたそうです。日本のテレビドラマや歌謡曲などは約1ヶ月遅れ程度で台湾に入ってきており、非常に人気があるそうです。

最近の台湾はパソコン関連機器の製造が有名であり、さまざまな部品を製造する中小企業が強いというイメージがあります。実際に、台湾は情報技術関係のハードウェアの生産では世界有数の存在であり、98年の統計では、モニターやマウスは世界シェアの約半分以上、またキーボードは世界のトップ、ノート型パソコンでは約32%のシェアを有しています。

今回訪れた2現場の中のひとつであるUNI-PAC社の位置する新竹地区は「台湾のシリコンバレー」との異名を持ち、情報技術関係を中心に約300社程度の企業があり、約7万人を越える方が働いています

また台湾には大企業はほとんどなく、アメリカでの教育等を受けた起業志向者が多く、組織に属する方もいずれは独立しようという意識が強いようで、先ほど述べた約300社のうち1/3程度の企業は、このような起業志向者たちが設立しており、アメリカに優るとも劣らずベンチャービジネスが盛んです。

この「チャレンジ精神」と「技術を大切にするという気持ち」は、私たちも持ち続ける必要があると感じました。

## ビールはやはりサッポロで

関空に着き、QDI社の現地プロジェクトマネージャーをされている環境装置事業部の遠山参与に現地まで同行していただきました。

機内での出来事ですが、機内食が出てきた時、「ビールのメーカーは何がいい？」と遠山参与が尋ねたので、元気良く「アサヒで！」と答えたのですが、その直後に遠山部長が低い声で「私

「やはりサッポロで！」と言われました。化工機事業部ではアサヒビールで大型攪拌翼「フルゾーン」が大活躍していることに対し、環境装置事業部はサッポロが最大顧客のひとつであり多くの方がサッポロを好んで飲んでいるのです。この瞬間「しまった！ウソでもサッポロ」と言えば良かったと思い、現地に着くまでの時間はお互いに変に気まづくなってしまうました。でも環境の方だって近所の居酒屋に行けば「やっぱりビールは麒麟や」と言いませんか？またひとつ当社の事業の広さを痛感した次第です。

## QDI社訪問

客先：QUATA DISPLAY INC (QDI)  
所在地：桃園懸  
工事名：排水処理・排水回収設備新築工事  
期間：2000年4月～2000年11月  
SP駐在：遠山PM、有住氏、信岡氏、前田氏

台北空港から華夏にあるホテルでいったん荷物を下ろし、桃園懸にあるQDIの現場を訪問しました。

QDI社は、環境装置事業部の民需部門の最大顧客のひとつであるシャープ株式会社が技術的支援を行い、液晶ディスプレイを生産している



メーカーで、当社はQDI社に排水回収処理設備を納入し、プラント完成に向け急ピッチで作業を進めているところでした。

現場では当社の現地駐在員4名の方が、毎月平均50～60名程度にもおよぶ現地の作業者を指導しながら工事を進めていました。工場の規模は見たところ播磨製作所の3倍程度の広さがあり、ひょっとするともっと広いかもしれません。排水回収処理設備は建物の中に地下1階、地上2階まで設置され、建物の高さは7階建てのマンションぐらいあったように思います。

安全については、正直に言うと日本の現地工事に比べるとくびをかしげる点も見受けられました。

安全にも通じますが、播磨製作所でもよく口にする「一仕事一片づけ」という仕事の基本についても、日本人とは考え方が違うようで、現地に駐在されている当社の方々も相当苦労されている様子でした。

安全以外では、当社の工事受け持ち範囲外ですが多くの女性作業員が、ヘルメットをかぶりタオルを巻いて仕事をしている姿を目にして、大変驚きました。

当社の駐在員の方は、現場責任者や指導員という立場から実際に部材を手を持って作業することはありません。しかし、日本から近いとはいえ海外の客先の現場ということで、仕事上のプレッシャーは相当なものであり、ストレス発散方法を持つことが健康を維持する最善の策であると感じました。

こうしてQDIの現地視察を終え、その日の夜は、現地駐在員の信岡さん、有住さんと一緒に夕食をとりました。信岡さんは以前に播磨製作所でGLラインの職場長をしておられ私も播磨ではお世話になっていたもので、久々のそれも異国の地での再会に話がはずみました。

夕食は台湾の海鮮料理だったのですが、私は生ものが苦手なことと「水はあたる」と聞いていたため、あまり食べることができず台湾ビールを飲んでいました。すると「チャーハンはどう

まいぞ」と言われ、早速注文して食べてみると日本より美味しく、さすが中華料理の国だと実感しました。結局、初日の食事は台湾ビールとチャーハンでしめたのです。

## UNIPAC社訪問

客先：UNIPAC OPTOELECTRONICS CO.  
(UNIPAC社)  
所在地：新竹市  
工事名：排水処理設備新築工事  
期間：2000年8月～2000年9月  
SP駐在：梶山PM、前田氏

翌日は桃園から新竹市にあるUNIPAC社の現場へと行きました。

UNIPAC社は、台湾で最初に半導体を製造したメーカーであるUMCグループの一員であり、こちらもQDI社同様に液晶を製造しているメーカーです。当社は、UNIPAC社に対し排水処理設備を納入し、工事完成に向け最終的な詰めを行っているところでした。

ここでも2名の当社駐在員の方が、1日平均20名程度の現地の作業者を指導しながら工事を進めているところでした。この現場では工事もほぼ終了間際であり、また工事自体の範囲が狭く安全面についてこれといって指摘するところはありませんでした。

また客先との打ち合わせが多く、日本語と英語と北京語とさまざまな言語が飛び交っており、世界の共通語は英語であるという反面、英語が全てではないとも感じました。

結局UNIPAC社では1時間程度しか現地を視察することができず、非常に残念な思いでした。

こうして2現場を視察しましたが、現地で駐在しているみなさんは、特に言葉の壁、体調管

理、またストレス解消法について相当苦労されているように思いました。仕事上、通訳の方がついているものの、作業者の安全管理や、作業でのアドバイスなどをほとんどジェスチャーで行っていると聞きました。また現地で駐在されている方々は、日本に帰った時は梅干しや漬け物を手みやげに現地へと戻っているそうです。

2日目の夜は、台北にあるホテルに宿泊なので新竹から台北へと電車で移動しました。電車の中は日本と同じで、携帯電話が鳴り通してました。日本の「もしもし」が台湾では「ウェイ」であり、車中いたところで「ウェイ・ウェイ・ウェイ」とことばが飛び交っていました。電車に乗ること約50分ようやく台北へ到着しました。

台北での夕食は、遠山参与と再会し日本料理となりました。夕食も終わり、店を変えてアルコールが入ったころ、人の名前を台湾語で教えてもらいました。ちなみに当労組の委員長は、「関谷久之」「クワン・クー・チョウ・ツー」といい、店の中では「もう、うちのチョウ・ツーは！」って喋っていました。ちなみに私は「ツヨン・チュエン・ツー・ポー」であり「ツヨン・チュエンさん」と呼ばれながら楽しい時を過ごしました。台湾での飲み方は、一回コップに口を付ける前にグラスをあて、乾杯してから飲むのが慣わしとなっていました。

## 台湾散策

3日目はせっかくの日曜日でもあり、自分一人で自分の足でいろいろな町へ出ていこうと思いい、言葉の壁があるものの何か得るものがないかと、タクシーを捕まえ見知らぬ土地、町へと繰り出しました。

まず最初は、蒋介石の偉業を記念するために造られた中正記念堂という巨大な建築物へと行ってきました。中正記念堂は台北市の中心に位置し、アーチ型の大きな門に「大中正」と書

かれています、これは「どんな苦難にもめげず、誠心誠意国民に尽くす」という意味で、蒋介石の座右の銘であったそうです。建物の中には、蒋介石総統の巨大なブロンズ像や、業績を記念する資料や写真が展示されていました。中正記念堂は、台北市民が日常的に訪れ利用できる愛着のある場所となっているそうです。

ここでは5才ぐらいの子供達が、遊び道具として新体操のリボンを片手にはしゃいでおり、やはり体操選手に憧れているのかな?と思いました。

次は、線香の煙が絶えないという台北最古の寺である龍山寺を訪れました。1738年に建立され、下町情緒が残る町並みの一角にあり独自のきらびやかな色彩で飾られた彫刻と建築美とどんな願い事もかなえてくれるという霊験あらたかな寺として、いつも多くの参拝客でにぎわっているそうです。

最後はフランスのルーブル美術館、アメリカのメトロポリタン美術館、イギリスの大英博物館と並んで世界四大博物館のひとつに数えられている故宮博物館へと行って来ました。中国5千年の歴史を物語る歴代皇帝のコレクションは、約70万点におよび、そのうち常時展示されているのは2万点程度であり3~6ヶ月毎に入れ替えているそうです。

こうして3カ所を巡りましたが、このように人が集まる所には必ず屋台というものがありました。日本ではたこ焼きといったところですが、



台湾ではウインナーがよく売れるそうです。食べてみたのですが1口、2口は美味しいのですが、もうその後はニンニクの味しかしませんでした。

続いてホテル周辺の商店街を散策しました。ここでは台湾の名物料理といわれるヘビ料理がたくさんあり、店頭で綺麗な女性が左手にヘビをもちショーをやっていました。いたるところから悲鳴が聞こえ、前の方へ行くと後ろから押されあわや手が届くくらい近づいてしまい、さすがに逃げて帰りました。また記念に写真を撮ったのですが、ここの商店街はどこの料理店でも写真は「NO」と書いてあり、どうもフラッシュの光が動物に悪いため写真撮影は禁止のようで、大変怒られてしまいました。ルール、マナーはどこへ行っても気をつけなければならぬと肝に銘じました。

ここの商店街にCD屋があり、ふとのぞくとほとんどの物がヒット商品の海賊版でさすがに安く、私の好きなロックバンドのCDのベストアルバム3枚入りで1,000円程度で買うことが出来ました。ちなみに北島三郎のベストアルバムも1,000円程度で売っていました。

時間が経つのも早くいつの間にか夕方になり、ホテルに帰る道中で日本料理の居酒屋を見つけ、最終日の夕食はそこに行くことにしました。その居酒屋は、店長が大阪出身の方で気があったのか話が盛り上がり、台湾での生活事情などについて教えてもらうことができました。





た。その店長とは今でも電話連絡し合い国際交流をしています。とは言っても日本人ですが...

後で考えると、結局、3泊4日の滞在中、2日間は日本食でもう少し台湾料理を体験しておけば良かったと後悔しています。

そして翌日、昨夜の居酒屋の店長が、事前に台北空港までのタクシーを交渉してくれていたの、通常の7~8割の値段で空港まで行くことができました。その運転手さんは、いろんなことを私に喋りかけてくれるのですが、意味が分からず無言のまま時間だけが過ぎていきました。空港までの残り時間、どうしてもこの人とコミュニケーションをとりたいと思っていると、「そうや！言葉がだめなら漢字ならわかる！」と思い、手帳を取り出しいっぱい漢字を書き込みました。すると空港近辺で渋滞し運転に少し余裕が出てきたので、運転手さんもこれならできるといわんばかりに漢字でやりとりをしました。運転手さんが「今度、何時、来」と書かれた時、別れるのが嫌になり、何か熱いものがこみ上げてきました。空港に着くとこの運転手さんが、「君、好好」と書いてくれ自分がかけていたサングラスをプレゼントしてくれました。最後に握手をし、そのぬくもりを感じながら別れることになりました。

今更ながら、どうして少しくらい北京語を勉強しておかなかったのだろうと後悔しています。

今回の経験から、私は時間を作り何かひとつでも他の国の言葉でコミュニケーションがとれるような勉強をしたいと感じました。

## おわりに

この出張では、当社の従業員が海外で活躍している姿に直接ふれることができ、会社の中には自分が知らない世界があることと、誰でも努力次第では様々な世界で活躍する可能性があるということ、あらためて知りました。

台湾では「何を感じるのか、どのように変わらなければならないか」ということまで考えることができませんでしたが、この出張が終わった時、今回の体験で自分が感じたことを人に伝えることが大切なことであり、重要なことだと実感しました。

また一人で言葉の通じない海外へ行くことは、自分自身で考え行動しなければならず、これが成長にもつながるのだと実感しました。そして自分自身の視野を広げ自らがレベルアップするためには、新しいことに対して積極的にチャレンジすることが最も大切であると痛感しました。

播磨製作所には、業務で海外に出るチャンスが少ない若手層が多くいますが、もし今回のような機会があれば、自分自身で考え行動するといった成長につながるのではないかと思います。



す。

最後に、この海外現地工事視察に参加させていただき、職場のみなさんに感謝し、御礼を申し上げます。

以上